

## 1.7.2 引抜き荷重の判定基準について

地盤工学会の基準書 (p159) によれば、荷重—変位量曲線 (図 7.2.1) が完全に下向きになった時点 (あるいは荷重—塑性変位量曲線の勾配が急激に下向きになった時点) の荷重値を極限引き抜き耐力とするよう示している。しかし現場での実測によれば、理論伸び量曲線から乖離し始める荷重段階においてアンカー体周辺地盤内での荷重作用方向に大きな変化がみられ、アンカー体の降伏状態に達したものと判断される。特に永久構造物として設計する場合は長期耐久性が問題となることから、この段階をもって極限引き抜き耐力とすべきである。

アンカー形式	圧縮型	引張型
引抜き荷重 (図 7.2.1 より)	720kN	820kN
アンカー力作用点位置 (図 7.2.2 より)	荷重 700kN まで、一定	荷重増とともに深層化 (=引抜状態)
アンカー力作用方向角 (図 7.2.3 より)	荷重 300kN 以降徐々に低角度化するが、特に荷重 450kN, 600kN でやや大きく変化している。	荷重 250kN 以降、方向角が乱れる。
理論伸び量曲線から乖離する荷重 (図 7.2.1 より)	荷重 450kN	荷重 250kN
降伏荷重の判定 (図 7.2.1 より)	荷重 450kN	荷重 250kN

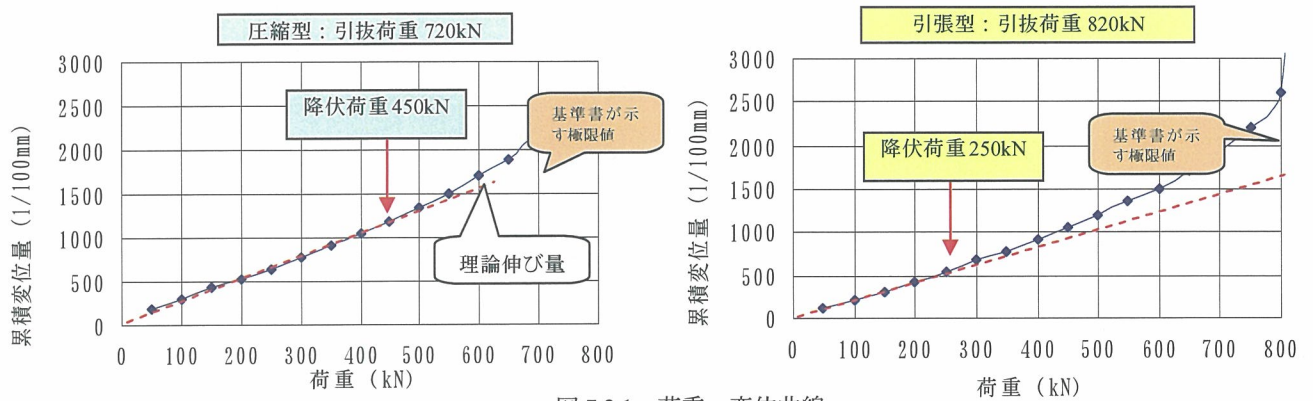


図 7.2.1 荷重—変位曲線

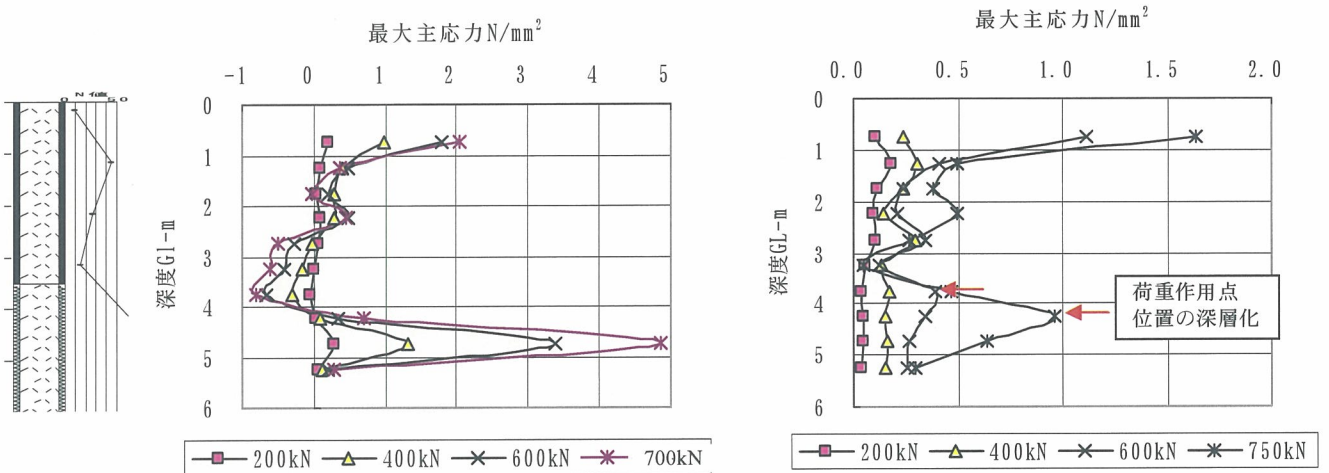


図 7.2.2 荷重—変位曲線

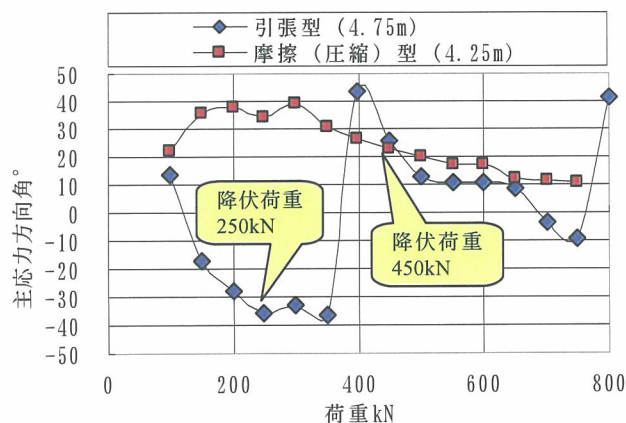


図 7.2.3 荷重—歪み曲線